

第二十七回国際軍事史学会参加報告

林 吉 永

二〇〇一年（平成十三年）八月十九日から二十四日までの六日

間にわたってギリシアの首都アテネで開催された第二十七回国際軍事史学会に参加した。今回の共通テーマは「軍事紛争と二〇世紀の地政学」であった。今大会には国際軍事史学会に登録している三五カ国から一五〇人を越える参加者が一堂に会した。その中には、昨年度、防衛研究所が客員所員として招聘した米国オハイオ州立大学のアラン・ミレット教授やドイツ国防省軍事史研究所のユルグ・ドゥツプラー所長の顔も見られた。また、防衛研究所からは筆者のほか、石津朋之、立川京一の両名（ともに戦史部第一戦史研究室主任研究官）が私費で参加した。

開会式にはギリシア国防相、同統参議長らが、マケドニアのアルバニア系武装組織の武器回収問題で忙しい合間を縫って出席し、挨拶をした。

大会全体の雰囲気はひじょうに和やかであり、ギリシア側スタッフはホスピタリティに一生懸命であった。

大会日程は次のとおりであった。

- | | |
|--------|------------------------|
| 八月十九日 | 午前・午後——受付、諸会合 |
| | 夜——記念艦「アヴェロフ」見学、レセプション |
| 八月二十日 | 午前——開会式、第一・第二セッション |
| | 午後——特殊部隊訓練センター見学 |
| 八月二十一日 | 午前——第三・第四セッション |
| | 午後——第五セッション |
| 八月二十二日 | サロニコス諸島見学 |
| 八月二十三日 | 午前——第六・第七セッション |
| | 午後——アクロポリス遺跡見学 |
| 八月二十四日 | 午前——第八・第九・第十セッション |
| | 午後——総括、閉会式 |
| | 夜——レセプション |

研究報告は四六人が、順次、行った。報告テーマに鑑みて、次の一〇のセッションが組まれた。

- 第一セッション 「地政学の理論」
- 第二セッション 「地政学の論者と研究」
- 第三セッション 「地理と国益」
- 第四セッション 「領土と軍事紛争（その一）」
- 第五セッション 「領土と軍事紛争（その二）」
- 第六セッション 「同盟」
- 第七セッション 「軍隊と作戦」
- 第八セッション 「制海権」
- 第九セッション 「情報活動」
- 第十セッション 「平和と国際安全保障」

共通テーマである地政学の理論や論者、その発展の歴史、各国における地政学の受容の様相などを取り上げた研究報告が何本かあり、中には出色と言えるものもあったが、大半は地政学とはほとんど関係なく、外交史や作戦戦闘史の研究報告に終始していた点が残念に思われた（もちろん、後者の部類に入る報告の中にも興味深いものはあった）。また、予定していた報告者が直前に辞退したり、あるいは報告タイトルが変更されたりということがあったが、大会運営上の問題にはならなかった。

今大会では日本人の報告者はいなかった。次回大会には防衛研究所から報告者を二名、立てられるよう努めたい。

エクスカーションは四回、実施された。まず、十九日夜、アテネのピレウス港に繋留されている記念艦「アヴェロフ」を見学した。二十日午後にはサラミスの海戦が行われた海峡に面した特殊部隊訓練センターで日頃の訓練成果の一端を見学した。二十二日は観光船をチャーターして、ペロポネソス半島沿岸の三つの島（独立戦争の際に首都が置かれたエギナ島、ギリシア海軍発祥の地であるヒドラ島など）を一日かけてめぐった。そして、二十三日午後にはアテネ市内に残る世界的に有名なアクロポリスの遺跡を見学した。

今回で三回目の参加となったが、回を重ねるごとに各国の軍事史研究者との面識が広まると同時に既知の研究者との友好を深めることができ、また、二国間・多国間研究交流、セミナー、シンポジウム、出版などに関する情報の交換や招聘調整の場ともなっている国際軍事史学会への参加は、軍事史研究の側面から防衛組織間の国際交流を促進するという意味で有意義な活動であると言える。実際に今回も、米国、英国、ドイツ、オランダ、イスラエルなどから研究交流が持ちかけられた。実現に向けて努力したい。

次回（第二十八回）国際軍事史学会は二〇〇二年八月十一日から十六日にかけて、米国ヴァージニア州のノーフォークで開催さ

れる。共通テーマは「アメリカへの到来——ユーラシア大陸の軍隊が西半球の発展に与えた衝撃——」である。また、二〇〇三年の第二十九回大会はルーマニアで、二〇〇四年の第三十回大会はモロッコで開催される予定である。